法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

”循環型社会”を問うを問う ： 生命・技術・経済，エントロピー学会編，藤原書店(本の招待席)

Onishi, Hiroshi / 大西，弘

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
2
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
89
(終了ページ / End Page)
89
(発行年 / Year)
2002-03-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004487

Hosei University Repository

本の招待席

“循環型社会”を問う
——生命・技術・社会——

（エントロピー学会編、藤原書店）

魅力的な書名を冠した本である。

書店に並ぶ数多の環境関連の書籍にあって、思わず手が伸びてしまう一冊だ。書名のみならず、中身も期待を裏切るものではない。“問う”とあるが、“循環型社会”をどう捉えたらよいか、その拠りどころを与える示唆に富む良書である。

本書は日本におけるエントロピー学会のこれまでの活動に基づき、その成果を「生命系と環境」、「技術と環境」、「経済と環境」、「社会と環境」の四つのカテゴリーに分け全12章として編成したものである。エントロピー学会とは、環境問題に関心をもつさまざまな分野の研究者をはじめ、広く市民学生等の参加によって運営されている異色の学会である。それだけに本書の語り口は、巾広くできるだけ多くの人が読めるよう平易を心がけ、専門的な用語には別項に解説を付す配慮もし、全体として読み易いよう工夫が凝らされている。

環境問題は、極めて複雑にして精微な循環に基づく自然の生態系が、人間の営為によって乱され出したことに起因する。環境問題を認識しそれに対処しようと考えるなら、まず自然環境がどのような仕組みの循環により成り立ってきたか、あるいは成り立っているかを理解する必要がある。

環境に対する理解が未だ現象論の段階にあるとされる中で、本書ではエントロピーを基軸概念として据えて、環境の理論として「生命系と環境」で構築している。エントロピーとは物質・エネルギーの拡散の度合を定量的に示す量である。自然の状態では、物質はただ拡散するだけであり、エネルギーも最終的に熱となって拡散する。すなわちエントロピーは増大していく。生命活動においても、部分ではエントロピーは減少するものの、総体ではやはりエントロピーは増大してゆき、エントロピー増大則を免れることはない。地球における物質・エネルギーの流れをエントロピー増大則に則って物質循環の仕組みの多くを解明し、生命と環境との関係および環境の多重構造を実証的に示した正に目からウロコという展開は、地球環境とは何かを多くの人に再認識させることと思う。

ところで書店には“リサイクルのすすめ”という本も“リサイクルはしてはいけない”という本も並んでいる。いったいリサイクルは善なのか悪なのか！　ゴミの分別に神経を使う我々にとり、今日抱える大問題の一つであるが、生産・廃棄さらには原子力、環境ホルモン等々を包摂した人間の営為としての今日的技術も、先述と同様に物質循環の環の一つとして考察することで問題解決の糸口が見えてくる。「技術と環境」の“技術—できること・できないこと”の章で、リサイクルに対する考え方の本質が明らかにされる。

誤解のないように付け加えたいが、本書はエントロピー概念で全てが方付くと言い張っているわけではない。自ずと限界はあり、その点にも言及している。主要な基軸概念であり、そこに立脚すると問題の所在がより見えてくると主張しているのである。また環境問題は科学技術の進歩により解決されると期待されているが、意外にも科学には原理的に限界があることが述べられている。社会あるいは行政の科学に対する姿勢に問題があるからだが、各所で触れられているこの点についてもぜひ本書を読んでほしいと思う。環境問題は否応なく経済・社会と絡んでくる。

「経済と環境」で、市場原理の下では環境問題は解決困難との論述、物質および経済循環を結ぶ手立てとし一部の地域で実行されている地域通貨の考えは示唆に富み、「社会と環境」での環境と地域経済を結ぶ鍵となるコモンズ論の展開も興味深い。

各章末のQ&Aも、この本を一層面白いものに仕上げている。日本における第一級の諸氏により成る本書が、座右の書として多数の人の手元に置かれ、おおいに活用されることを期待したい。

（大西　弘）